

# T. S. エリオットの形而上詩講演

船 木 満 洲 夫

## 1

エリオットはダンの詩における重要概念として、‘the union, the fusion and identification of *souls* in sexual love’ をあげる<sup>(1)</sup>。ダンを論じるときエリオットにつきまとうのが、模範と仰ぐダンテらの「感覚と思想の融合」の力だ。<sup>(2)</sup>心理学的なダンが何らの哲学ももたず、また伝統の重要性が彼にはほとんど認められないと述べるのは、とりもなおさずダンテがダンの養分にはならなかったことをエリオットは示唆する。<sup>(3)</sup>

「至福の朝」(*The Good-morrow*)の最初の連は、エリオットから見れば‘teasing the idea’の一例であり、‘Donne, instead of pursuing the meaning of the idea, letting it flow into the usual sequence of thought, *arrests* it, in order to extract every possible ounce of the emotion suspended in it’<sup>(4)</sup>である。「観念をなぶる」「差し押さえる」のが情緒を抽出するためというふうに、「観念」に「情緒」を配する点に注目したい。<sup>(5)</sup>エリオットの脈絡は、彼自身のダンの詩への対し方、押さえて抽出するやり方とそのまま重なるようではないか。以下、具体的な作品をどう問題にするかを整理して調べることにしよう。

「恍惚」(*The Extasie*)の最初の4行連――

Where, like a pillow on a bed,  
A pregnant bank swelled up, to rest  
The violet's reclining head,  
Sat we two, one another's best.

これは修辞表現の混合だとエリオットは非難する。堤を枕にたとえたり堤がみごもっていると言うのは納得できない、堤が盛りあがるのは堇と堤の関係を考えると「自然界の秩序の侵害」につながると<sup>(6)</sup>。エリオットは形、地震、位置、大きさ、あるいは目的因に言及しておよそ自然科学的に解釈するのだが、こうした解釈は一面のそしりをまぬがれないのではないか。エリオットによれば、第2連の初めの2行は感覚的な叙述として許されるとしても、眼を二重（ふたえ）の糸で縫い合わせるの理解し難いし、第3連の欠点は、二人の手の接合が接ぎ木のイメージとすり合わされること、「映像を生み出す」というのは自然の侵害であること、詩人が恍惚に専念できずに普通の肉体的結合に早くもなぞらえていること、第4連は魅力的な修辞の意味がはっきりしない<sup>(7)</sup>。しかし二人の魂が脱け出すに至る過程は必ずしも分明にはならないものではないか、恍惚の意味の展開こそ重要なのではないかと疑問が起こるし、むしろ詩人が醒めている様子を読みとりたいところではなからうかと筆者には思われる。第五連は――

And whil'st our soules negotiate there,  
Wee like sepulchrall statues lay;  
All day' the same our postures were,  
And wee said nothing, all the day.

このスタンザは殊に巧妙だとエリオットは珍しくほめる。‘negotiate’の語の使用も、‘sepulchrall statues’のイメージも、‘All day’の‘all the day’へのエコーも、また‘And wee said nothing’というきわめてダンの装ったと思える簡明さも完璧なのだ<sup>(8)</sup>。スタンザによってエリオットの視点が異なる。つづくいくつかの連では、観念を差し押さえこづきまわしてもてあそんでいるが、次第に新しい重要な観念に導かれてゆく――つまり第11連(When love with one another so...)のおそらくはこの詩全体の土台を成す観念、‘the isolation of soul from soul, its craving for the rare moment of semblance of fusion with another’という観念。こうエリオットは解釈するのだが、この連は魂と魂の「融合」ではとても説明できない内容を含んでいるのではないか。この

観念が詩の残りの部分のテーマの前置きとなつて、第13連 (But O alas, so long, so farre...) を経て最後の三つの連では、魂と肉体の区別、分離が明確に指定されるとエリオットは考察する。

結論はこうだ——

And the conception of the ecstasy of union between two souls is not only philosophically crude but emotionally limiting. . . . This union in ecstasy is complete, is final; and two human beings, needing nothing beyond each other, rest on their emotion of enjoyment. But emotion cannot rest; desire must expand, or it will shrink. Donne, the modern man, is imprisoned in the embrace of his own feelings. There is little suggestion of adoration, of worship.

「二つの魂の結合の恍惚という概念」をエリオットは批判し、結合が完結したもので互いを超えて求めることはしないと論じるのだが、<sup>03</sup>「結合」はこの詩では魂の間だけのことでなく、むしろ肉体の結合がきわ立っている点をエリオットはなおざりにするのだろうか。魂の恍惚だけ切り放すわけにはゆかない。男女の愛の恍惚の中身をエリオットはあまり顧慮せずに、感情や情緒の面よりもむしろ思想や観念（概念）に狙いを定めて、それを心理学だけでなく哲学と宗教の観点から難じているようにとれる。‘adoration’ ‘worship’ の暗示がほとんどないと述べるエリオットは、さらにダンの宗教的著述が ‘surrender and assent’ に欠けると見てダンテを引き合いに出す。<sup>03</sup>これらの語は神に対せる姿勢をひびかせるし、宗教性が弱ければ評価しないエリオットの立場はぬぐえないのではないか。

## 2

「埋葬」(*The Funeral*) と「聖遺物」(*The Relique*) は同一の主題のヴァリエーション。

Who ever comes to shroud me, do not harm

Nor question much  
 That subtile wreath of hair, which crowns my arm;  
 The mystery, the signe you must not touch,  
     For 'tis my outward Soule,  
 Viceroy to that, which then to heaven being gone,  
     Will leave this to controule;  
 And keep those limbes, her provinces, from dissolution,

エリオットによれば、「埋葬」のこの冒頭の連にはダンの特徴的な手順が示されている。最初の3行は申し分なく単純で、形容詞 'subtile' も的確、唯一の欠点は動詞 'crown' のいささか 'distracting' な隠喩。5行目とともにコンシートが著しくなり、読者は錯綜の中に入りこむ。それは思想の密度を減じるといったようなことがあるけれども、とにかく楽しませてくれるし、イメージリーの巧妙な工夫に本気のウィットが発揮されている<sup>10</sup>。このエリオットの説明はすっかりした文調ではない ('though' 'but' 'yet' に注意)。ダンをほめるのが不得手ということがあろうし、「内面の分裂」に言及するなら、それこそエリオットには放っておけない攻撃材料ではないか。「聖遺物」の最初のスタンザは――

When my grave is broke up againe  
 Some second ghest to entertaine,  
 (For graves have learn'd that woman-head  
 To be to more than one a Bed)  
     And he that digs it, spies  
 A bracelet of bright haire about the bone,  
     Will he not let us alone,  
 And thinke that there a loving couple lies,  
 Who thought that this device might be some way.  
 To make their soules, at the last busie day,  
 Meet at this grave, and make a little stay?

ここでは手順がちがって、コンシートで始まり中途から単純になる、こちらのほうが効果的とエリオットは読む。屍衣を着せるときではなく、墓が掘り返され

るときに形見の発見を設定するのは、情熱をより長つづきさせるし、骨になった腕にからみつく金髪の腕輪をより意味あらしめる。しかし「第二の客を迎える」ために墓をあばくという考え方、ましてや女の移り気に対する墓の定めなさの類比については、重要さや好みの問題が残る。エリオットはさらに、この連の終りに認められる多少の‘distraction’と、全く異質の思想と感情の結合に疑問を抱く。<sup>99</sup>類比に関してダンに特有の「観念の連想」に触れるのはうなずけようが、その内容の重要さと好みを疑っていたエリオットが、あとの場合には自分の好みに合うと明言するように判断の揺れを示している。「節操をほめたたえる詩」という視点とかみ合うのであろうか。

次のスタンザは――

If this fall in a time, or land,  
Where mis-devotion doth command,  
Then, he that digges us up, will bring  
Us, to the Bishop, and the King,  
To make us Reliques; then  
Thou shalt be a Mary Magdalen, and I  
A something else thereby;  
All women shall adore us, and some men;  
And since, at such time, miracles are sought,  
I would have that age by this paper taught  
What miracles were harmelesse lovers wrought.

ここでは骨に巻きつく花輪の意味からそれて、その想定のある得る結果にダンの思いは占められているとエリオットは指摘する。ダンの方法はしばしば大から小、中心から周辺、激情から内省へ移るが、この点で彼が自分の心情に忠実なのは、熱情はきわめて単純で強烈でない限り、また何か他のものに転化させる高度の哲学に支えられていない限り、常に色あせざるを得ないから。ダンにおいては熱情は衰えて暗示され観念の遊びとなるのであり、ダンはある衰退と変化の境界の大いなる統治者だとエリオットは言い、この論述でもダンテを念頭において<sup>100</sup>。熱情が色あせて観念の遊びとなるとダンを批判するとき、

「高度の哲学」とダンの分裂に対するダンテの統一性を軸に、時代の推移を視野に据えるエリオットである。その評言の感情から理知への方に、心理学的な角度だけでなく宗教的不滅の道筋が読みとれるのではなからうか。つづいて Mario Praz の論評に関連して、エリオットが「花」(*The Blossome*) のシンシズムを問題にし、シンシズムは常に精神的な分裂と統一の欠如の表われであり、幻滅の文学は未熟の文学だと断じるのは、彼の立場の狭さを示しはしないか。分裂か統一かはエリオットの場合、文学の次元を超えているようにとれる。

## 3

J. B. Leishman は *The Monarch of Wit* で「至福の朝」, 「聖ルーシーの祭日に寄せる夜の歌」, 「別離の歌——嘆くことを禁じて」を含む詩群について、ウィットと熱情、理知と感情の関係が一様でないこと、二人の恋人が自分たちだけの一つの世界だとの観念が繰り返されることを見逃さない。この世界は「至福の朝」で明らかなように、何ものにも改変できないが故に不滅なのであり、ダンの現世放棄は別世界ではなくて一種の私的な世界に与するもの、そこには極端論の要素が見られるのだ。<sup>(21)</sup> William Empson は *Essays on Renaissance Literature* でさらに踏みこんで論じる。ダン<sup>(22)</sup>は愛の殉教者として姿を現わすが、キリストの属性が適用されることはあっても、聖書のキリストとは全く異なる存在だというのがその要点だ。「聖遺物」で邪教の時代になると、「きみはマグダラのマリアのようになり、それでばくも／何かかなりの者にされるだろう」と歌っているのを非難した Helen Gardner は、自分の骨がキリストの骨と考えられることを暗示しても、キリストの墓には経帷子の他には遺物が残っているはずはないと強調した。<sup>(23)</sup> これに対して彼の見地から応答した Empson は、重ねての Gardner の反撃に応じてダンの時代に言及しながら、詩人が真の愛の殉教者、真の愛の一個のキリストとして登場することで上の詩行に問題のないことを主張した。<sup>(24)</sup> この論争 (Theodore Redpath もからむ) の軍配は Empson の方に上がるだろうが、実りある論争とはとても思えない。精神的、霊的なことは物質的なこととは区別してかからねばならないのではな

いか。

ダンの最も成功したコンシートの展開をエリオットは「別離の歌——嘆くことを禁じて」(*A Valediction: forbidding mourning*)に見る。その説明はこうだ。最初の3連には欠点がなく、4行連句の扱いの見事さは他の詩人に類がないし、天文学の比喻も誇張の効果が争えない。第4連で恋人たちは現代用語で言う‘cosmic’なのに対して、他の恋人らは‘sublunary’な連中、第5、第6連ではコンシートが賛辞に近く、ダンが信じていることが定かでない——(修辞)表象によって観念は理解されるのだが、当然のことながら表象を得るまで観念は存在しない。つづく最後の3連は見事な表象、しかしイメージが重要で観念は付随的だ。結論的にエリオットが述べるところでは、ダンは二次的な形式の達人で、超感覚的な感情を記す能力をもつが、その感情は混乱した心のもので秩序ある心のものではないし、直接経験が思想に移行はしても思想が「信念」に達することがない。<sup>60</sup>

この詩は妻との関係も含んでいて、理知とウィットに富むと同時に情愛がこもっており、それだけでなく日常生活からの超脱の要素があると Leishman は指摘する。おそらくこの詩だけに、ダンのいわゆる「抽象的な霊的な愛」が優勢を占めているとも言える。<sup>61</sup>ダンの好みの方式——命題が類推による議論によって支えられる好例であり、詩と議論は分離できないし、この抽象的な観念の詩で視覚的なイメージはコンパスのイメージのみで、議論の綿密さ、観念の抽象性、視覚的なイメージの欠如、指示的な語の使用にもかかわらず、それなりの具体的な詩の効果をもつと Leishman は考察する。Joan Bennett は第4、第5連に適度の韻律を伴った思想から思想への移行、情緒に似合った知的な表象を読みとり、またあとのコンパスの表現に関しては、情緒が知的なイメージへと締め、ダンの詩にはよく見られることだが、一つの法則が働いて理知にも心情にも同じように作用し、恋人の結びつきが永遠と完成の象徴になっていると論述する。<sup>62</sup>Leishman も Bennett も理知と心情の共存、観念や思想の効果を評価するのだ。エリオットのようにイメージが重要で観念は付随的とか、感情が混乱しているとはとらないし、そして「信念」にまで論及することはしない。エリオットは二人の著述を知っていておさえるポイントはおさえたとし

ても、文学を超えて自分の方に引き寄せているように思われる。

ダンの長詩では「世界の解剖」(*The Anatomy of the World*)の死の瞑想に関して、‘It has no philosophy, no structure or unity, no “central idea”, no real beginning or end; but it is the most metaphysical of all Donne’s metaphysical poems’ と評する一方、その「第一周年追悼詩」(*The First Anniversary*)と「第二周年追悼詩」(*The Second Anniversary*)の両方に‘verbal and metrical beauty’を認め、そこにはダンの抒情詩や説教に見出されるすべてが存在すると明言する。またも‘no philosophy’云々であり、こうなればエリオットが形而上詩を果たしてどうとらえたかが問題だけれども、定義しようとしたわりにはコンシートの点を除いて必ずしも定かでない。それをもっと明確にさせる必要を感じると同時に、ダンの詩の韻律の評価がすべての鍵を握っていると今さらのように受けとらざるを得ない。

## 4

エリオットによれば、クラシヨーは‘a devotional temperament’で、思想よりも感情の側に立つ人である。ダンが思想の耽溺者であるのに対して、クラシヨーは宗教的情緒の耽溺者であり、ダンの場合は思想がいくつかの思想に分裂するように、クラシヨーの場合は情緒がいくつかの情緒に分裂するとエリオットは見る。

「涙」(*The Tear*)では、処女マリアの眼に光る涙を八つのスタンザが、それぞれ別々の斬新な修辞表現で扱っている。第一連は‘soft thing’ ‘moist spark’ ‘the water of a diamond’がすぐれており、次の連も問題ない出来で、第六連に進むと――

Fair drop, why quak’st thou so?  
Cause thou streight must lay thy head  
In the dust? O no,  
The dust shall never be thy bed;  
A pillow for thee will I bring,



Stuft with down of Angels wing.

これはダンのうなだれた葦の枕（提）よりすぐれている、クラシヨーはうなだれた涙の頭部に天使の羽毛のつまった枕をあてがい、よくわきまえた真剣な効果をねらっているとエリオットは読む。さらにクラシヨーの「涙する人」(*The Weeper*)をP. B. シェリーの「ひばり」(*The Skylark*)やスウィンバーンの作品と比較して、ダン、マーヴェル、クラシヨー、マリーニのイメジャリーが‘deliberate’で、叙述が‘intellectual order’であるのに対して、シェリーやスウィンバーンのイメジャリーは‘careless’で、‘intellectual disorder’であると言う。時代のちがいを主たる考慮に入れるとき、ダンもクラシヨーもいっしょくたになるエリオットの傾向が見落とせないのではないか。

クラシヨーの最も注目すべき二つの詩は *A Hymn to the Name and Honour of the Admirable Saint Teresa* と *Upon the Book and Picture of the Seraphical Saint Teresa* で、前者は韻律の独創性と多様性において比類なく、後者は批評の域を超えて完成されているとエリオットは評価する。これは‘the ultimate literary expression of the religious feeling of that strange period of sensual religious intensity’だと言っているが、しかし他方では‘the ultimate religious expression’云々というふうに改めている。<sup>68</sup>「文学的」と「宗教的」が容易に入れ替わるほどエリオットには同じ意味のものなのか、あるいは信心深いクラシヨーの詩における両方の一致を買っているのか。いずれにしてもそれだけのことで、クラシヨーの宗教性の中味まで踏みこむことはない。

結局のところ、ダンのコンシートが観念を軸とするのに比して、クラシヨーの場合は知的範囲が限られて人工的、審美的になるのだ。<sup>69</sup>ダンの「思想」に対してクラシヨーには「感情」の語を適用するエリオットは、クラシヨーに関しては「感情の領域内の思想の領域」と言い、ダンの「感じとれる思想の連続」にクラシヨーには「思考される感情の連続」の句を当てる。<sup>70</sup>クラシヨーは人間の感情のまま人間的な対象を神聖な対象におき換える、つまり思想を感情に変質するダンに対して、クラシヨーは感情を思想に変質する錬金術師であったの

<sup>43</sup>だ。神の側に立たないで神聖な対象に近づくことができるのか、人間的なものを否定するのがキリスト教ではないのか——こういう疑問はさておくとしても、エリオットの信仰の姿勢がのぞくクラシヨ論と言えようか。注目すべきは終始ダンテを念頭におき、ダンテには思想と感情の体系があつて、その体系全体が感じとれ思考できると論じる<sup>44</sup>だけでなく、ダンテには感情の体系と対等の思想の体系があり、人間の感情を神聖な感情に変形して神聖な対象に適用すると述べ、その見方からクラシヨを考察することである。<sup>45</sup>人間の感情を神聖な感情に変えるのと変えないのとでは大きなちがいかもしれないが、「思想」と「感情」、そして「体系」で詩は論じつくせるのだろうか。<sup>46</sup>哲学や宗教の面で反発するダンに対しては公平さを欠くように思えるし、一方そういう面で愛着するクラシヨの批評も的確と言えるか疑問とせざるを得ない。

#### 註 テキスト

*The Varieties of Metaphysical Poetry by T. S. Eliot*, edited and introduced by Ronald Schuchard (Faber and Faber, 1993)

- (1) *Ibid.*, p. 54.
- (2) *Ibid.*, p. 58.
- (3) *Ibid.*, p. 83.
- (4) *Ibid.*, pp. 85—86.
- (5) J. B. Leishman は「至福の朝」の冒頭に「思想と感情の結合」を読みとる——*The Monarch of Wit* (Hutchinson of London, 1951), p. 204.
- (6) T. S. Eliot, *op. cit.*, pp. 108—9.
- (7) *Ibid.*, pp. 109—10.
- (8) *Ibid.*, pp. 110—11.
- (9) J. B. Leishman (*op. cit.*, p. 225) は、第8連の‘sex’の概念について、直接経験によるだけではなく、そこに含まれる要素を抽象的に分析している点を認めている。
- (10) T. S. Eliot, *op. cit.*, pp. 111—12.
- (11) *Ibid.*, p. 114.
- (12) この見方には、ダンの男女の世界が二人だけの個人的な世界だと見る J. B. Leishman (*op. cit.*, p. 221 等) の影響があるかもしれない。
- (13) T. S. Eliot, *op. cit.*, p. 117.
- (14) *Ibid.*, pp. 124, 266—67.
- (15) *Ibid.*, pp. 125—26, 267. なお Joan Bennett は冒頭の冷笑的な気分が辛辣さに変わ

っているのに注目するとともに、ダンのイメジャリーが知的探究の幅の広さを表わすことを指摘する——*Four Metaphysical Poets*, (CUP, 1953) pp. 31—32.

- (16) *Ibid.*, pp. 126—27, 267—68.
- (17) *Ibid.*, pp. 127—28.
- (18) J. B. Leishman, *op. cit.*, p. 179.
- (19) *Ibid.*, pp. 188, 190—1, 215.
- (20) *Ibid.*, p. 200.
- (21) *Ibid.*, p. 221.
- (22) William Empson, *Essays on Renaissance Literature*, edited by John Haffenden, *Volume one: Donne and the new philosophy* (CUP, 1993), pp. 86—87.
- (23) Helen Gardner (ed.), John Donne, *The Elegies and The Songs and Sonnets* (Oxford: Clarendon Press, 1965), p. li.
- (24) William Empson, *op. cit.*, pp. 141—42, 191—92.
- (25) T. S. Eliot, *op. cit.*, pp. 131—33, 273—74.
- (26) J. B. Leishman, *op. cit.*, pp. 42—43.
- (27) *Ibid.*, pp. 196—97.
- (28) *Ibid.*, p. 233.
- (29) *Ibid.*, p. 235.
- (30) Joan Bennett, *op. cit.*, p. 21.
- (31) *Ibid.*, p. 110.
- (32) T. S. Eliot, *op. cit.*, p. 151.
- (33) *Ibid.*, p. 157.
- (34) *Ibid.*, pp. 162—63.
- (35) *Ibid.*, pp. 168—69, 276—77.
- (36) *Ibid.*, pp. 171—72, 270—71.
- (37) *Ibid.*, pp. 172—75.
- (38) *The Poems English Latin and Greek of Richard Crashaw* (1928) でもクラショーの詩と比較して *The Skylark* の思考の乏しさを指摘し、また *The Devotional Poets of the Seventeenth Century—Donne, Herbert, Crashaw* (1930) でも同様に *The Skylark* の知的創意の欠如を難じている。
- (39) T. S. Eliot, *op. cit.*, pp. 178—80, 278—79.
- (40) *Ibid.*, pp. 180—81.
- (41) *Ibid.*, pp. 182—83.
- (42) *Ibid.*, pp. 200, 220.
- (43) *Ibid.*, pp. 225—26.
- (44) *Ibid.*, pp. 182.
- (45) *Ibid.*, p. 200.

- (46) 参考になると思われる見解をあげておこう。Edmund Gosse はクラシヨーの詩について、‘they are not poems of experience, but of ecstasy, not of meditation, but of devotion’ と言い (*Seventeenth-Century Studies*, 1885, p. 153), Grierson は ‘One cannot even speak of Crashaw as a mystic, for mysticism implies thought—and Crashaw does not think, he accepts’ と評している (*Cross Currents in English Literature of the 17th Century*, 1929, 1951, p. 182)。これらの見方を受けて Itrat—Husain はクラシヨーの詩の ‘religious ecstasy and exaltation’ を強調し (*The Mystical Element in the Metaphysical Poets of the Seventeenth Century*, 1948, pp. 172, 192), その ‘mystical experience’ あるいは ‘religious experience’ を明示しない点を指摘するとともに (pp. 164, 168), ‘devotional poet’ としてのクラシヨーを評価する (pp. 178, 192)。神の直接のヴィジョンあるいは神との合一に達したという証拠はまずないし、St. Augustine や St. Teresa のような ‘mystic’ というよりも、‘a poet with a mystical temperament, ornate and sensuous’ であり ‘devotee’ で、その詩には罪の意識も浄罪の苦しみも「魂の暗夜」のわびしさもなく (pp. 22, 164, 165), 専ら贖い主キリストがテーマ (pp. 167—70), そして教義上の暗示や偏見が全く見られない (pp. 178, 179)。エリオットとの関連では次のような論述も注目されようか——‘Donne’s religious poetry is also rich in its psychological content, but in Crashaw’s poetry there is no subtle and argumentative evolution of feeling or its fusion with intellect, his poetry is controlled more by emotion than intellect.’ (p. 168)